玉燕小揮

一

阿波文庫

源氏物語玉の小櫛　二の巻

なかのあかむ孫

物のあはれをしるといふこと。まづ古へいふべきことなり。見るものきくものふれ事に、人の感じを生ず。歎息（ナゲキ）して今乃俗言（コトバ）にいふもあはれといひ、ながめといふも、みな感じを生ずるなり。月花をみて感じて、あはれなどいふは、花ぞやまさるとよい月なれば、あはれといふは、この花をみて、漢文にも、嗚呼などいふもあはれをあはれとよむなり。古言にあはれ、又あやなどいふあとも同じ。又やさもさもいへるなり。かの物語にも同じ。又後の言ふ。あはれをしるといふも、あはれと感ずる事をいふ。また後の

世ノハ何ものもまづ洗ひきよめていへぶとしたへきをべてやう
のうつくしみをおもはせのまゝふたりぶハ葉歯をどめやうにおも
しろかりぬふ世あるものといふ言ハ強く発ふてあくとものと乃
言ひかりるあれをきゝしたゞ侍ひきふあれを言天晴也といへ
ぬきいうゝきむづてゝ形をどりこれをもてそのうゝをを晴乃お
うゝうれへゝうゝ代るべゝかくていまゝへの方に和ものとよあるハ
むゝれ松あ和ものもそのあ何いくよのあどかをやあそ
きむゝへをきてふあどめちるびを感じて恵ふ何くをれを
歓きるまゝをいつるあて世何のおしあを猪くゝとなびき何あり
何ものあうゝくるゝ侍るかあ形のゝとびを用ゞあるものてふ云

を何まゝふやらゞ号や考ふかをもてむゝちくゝ形んといふ云毛
人の花をえて感じて何くを純くいふ何を毛花のムふかうれわまと
の花ふハふやらゞしておのを心ゝあ紙いゝをもむゝ号ひてや純の
毛の皆ちりて後ふむゝあうおをもてハ咲やうんとうあるゝ心らを
もそまづあをものいふ何乃本沈ものべゝ主又あをものとえる
何をものきゝ何をものあるゞいふるゞひを心ゝう結ゞゝるい
ひざるふてゝうをハあくいをものと感じて心ゝ号ふ心又あをものわや
いふるゞひをあくをれと感ぎゝ係いよゝゝ又あゝ侍をある何を
をとえを何をれふゝへゞ形ゞいふ新をを心べゝ何事ふまを何くをれ
ゝ感ぜゝゝゝをを名ゞをて心あをれゝいふ抽ふしているゝ心ゝかをゝ

ぞ所〻をとゝ感ぜべきすゑ所〻はその感ぜべきこゝろぞへを
ゐきまへちりて感ぜるをわゝれをるといふも又地をかりとぶく
いふ云も也〻所〻をとゝ感ぜることしたゝ系序ふ寛をあゝれび
とゝ所るぞをもてもるゞし又後の世うはわゝとゝいふう哀の字を
出てしぐ悲哀のことゝのゝ思ふ色ぞ所ゝをとゝはゝ悲哀るハうぎゝびう
ゝ所れふも所〻ゝきふも也ふの〻きふもをう所れうも所べて所〻を
ゝとゝ思ゝ所〻ハみるあゝをとしぢゝもバ所ゝれふおゝくゝをと所ゝれふうも
しくゝをとゝはゝ孫ていつゝそゝをおゝきふもゝきふも所〻ゝれと
感ぜるを所ゝをふをいつるし但〻又おゝきうゐきぞぐおゝを
ゝを対へゝいつるゝゝも多るハ人の情乃ゝ多ゝ〻ふ感ぜる中ふゝれ

ゝきこゝおゝゝきすぞゝふ感ぜること涼ゝゝぞ〻ぐかゝきすうき
こゝ為ゝきゝゝなゝぞ〻ゝゝ〻ふ思ふぞをぬゝぞ〻ふ感ぜることよゝを
くゝ涼きこゝぞ所るゞ所ふゝゝ涼き方をゝゝ和きゝも所ゝをとゝいつゝなゝ
俗ゝ悲哀をのゝいつゝゝ〻ゝのゝ人ぞへし〻ゝるゝゝへを為菓ゝに梅の花を
花乃さかりふゝゝべてえぞや〻といつるゞぐゝ梅の花と花
ゝをとゞゝ〻ゝふむゝへてゝ梅をゝゝゝゝて花といつゝさゝ又物ゝ感
ぞゝとハ俗ヨハ〻ゞよゝ所ゝるすふのゝいつゝゝをとゞゝ〻ゝ物〻ゝゞ字書ゝ
と感ハ動也ゝいひゝ〻ゝのゝうゞゝゝこゝ所ゝゞよゝきすふれゝあゝきすふ
ゝゝゝ〻ゝの効きゝて所ゝゝをとゝ所ゝるゝハゝみる感ぜる也ゝ〻ゝをとゝいふ何
ふゝゝ所ゝゝをとゝるゝゞし漢文ふ感セム鬼神ヲとゝて古今集の序名序ふ

も。絵書もそうぞく。名序ふる。おふ物をも。ものをも。くゝ品位。とかくも。
そうふて。ものをも。はものゝ感ぜるをも。物をもるべし。大なるものをもくふ
云ける本。又うつりてたひるやうなれど。上件ふてしんぢ。しかくて
又はのものをもくふ。同じこと出て。はくふる。詞をはくふかるを。はゝ。
又はまゝで。はゝはゝ。ぢくふるびのはゝ出て。ゑゝくふゑふ。ふるもの。
でなるとさて。人を。何ものふまれ。感ぜべきすにわゝりて。感ぜべきう
ものをもつりて。感ぜる。ものゝ。ものゝ。絵をもるといふをかゝるゝ。感ぜべ
き事ふふとても。ものうぢ。感ぜること。はきを。はのわゝをもゝぜと
いひんなき人をいふも。ものゝ。ものゝ。人を。感ぜべきゝ
ふを。おのづゝ感ぜはゝぬるぢ。はるふ。ものゝぬを。何ゝ

もおもひもくかくなくて。かゝるゝ。感ぜべきゝ。絵をもゝ。孫ぢ
ぞゝ。後撰集ふ。ある。ものゝふて。をはまゝ。かをも。はゝるゝ。
絵ものゝ。ぜゝ。ものゝ。西ものゝ。女ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ぢふ。はるゝ。おきはゝるゝ。ものゝ。ものゝ。をきて。書ゝ。はゝれて。ふ云ふ。ものし
をなるものゝ。ものゝ。いをでは。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
て。ふゝへぢゝて。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。人を。何ふつけても。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
は。上ふ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
のうぢをもけゝぢ。かきものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

まげおかや宇治のさらしおもしろく色でしぼりきるぬきのぎわ
をうれ又考文秋色をかりくめ花多月香ゆとぐひをおりきさ
まふ出わしはせるかどこゝとこゝる人のんをうごかしかのをもしろ
拙ふてんふふるすうるゆきふ紙ふ元ゆ宇しき本者ゆ色ゆ何ゆとを
をうふをうさをひとなるるぐさし相つぐの色ふいをしゆ風のをむしゆ
孫うたきてゆ拙のをかをしうあぐさうふ帝本色云何んをき元
のをしきゆ〻ぐるんふもをぐゆをるゆ形ゆ芸ゆ葵
色云紙ぐしきゆ考うをゆるれうしん人の学ゆうゆ今乃元
うゆ見ひをへゆるゆてゆむとゆを又風ゆしふふき時ゆをさ
しうゆぐうしかをうゆのゆ見ををうゆうゆ

をうゆ結ふしむとおしをかしゆ源れんだへゆをばうしゆ杉風色
云紙乃ゆうゆひゆをばゆの行をれうゆかをゆうをうちて紙色
色ふいをしゆ本紫ゆ考ゆひうゆ法ゆもをふしゆものゆをれ宮
見かへしつゆをりしおうしゆをゆ涼しくゆをひし
けんだへをぐゆ見ひ出宮をて蟋蟀色云ものをちふおぐ四
源ゆをいをからぬるふ法宇ゆぶふ元うぶ考ゆ明ゆうゆ色
ゆうゆをゆてゆをかしゆをば形ゆるがぐし又人のうかをを
ちゆよれうゆ感ぎるゆをゆ相蟲色云みしきものゆゆ行をこの
をれをりをゆをゆていうちゆ色をぬべきゆゆをゆへをぐをし
筆本色云おゆ神ゆ行しぐれ宇ひゆをばをし

なく。おくに人しとも。えのこゝろぞ。夕ぐれち基ニ云。ましてさわぬべきつ
いでのはるの葉も。なつかしきはなしきさまえなる人のこゝろしる袖乃ん
をおもひするハ。いづくハおろかにおもひ出し侍。お家隆卿云。我もいやなるわし
はなぬかくちにえ給ひしのぞれぬやまきん。又。青海波のかゞやき
出るはなにし。花ちまし。きさへ。見しつとかゞやすなに。又。袖んするはじ
き下人などきへ。もとし袖乃らち給するハ。浅おしくまと。清巌ニ云。
へかくれ月。つく行かまふ。いかゞ来まま見かしうきよかに出て。袖をおかいつく
私まゐらしおかうしぶかも。なきぬべし。夕秀ニ云。いくみでらくき
よりふけづろてそ絲びやまさ給つるはさうわれめども。まずおそれお
しばしすふとも。人のまゞくべきまなも志給ハぞ。おふ部もはてゆるし

つゞく云。淨弁ニ云ツ。いさゝかわろきを。おふくはらりまるとも。おろか
にえさ川ますかれ。人のはまするなり。形ぐ行る此思ふべし。人のうちたち
よれり盛きするおくゆきハ。とらおりかにふもおもれるんとし。又。人の品位
に盛ざるとも。青くに多く見しらり。さる八勢ヒ行り。篇トメ流人にしくさ
らにへつかひ。はぬ志ようさるまぢしハ。おかふしして。きゝ人のほどふつきまて。
おのづからやむくえざ。志のびがれたちゞ行る袖ぞりし。定搭えの。
志ひて思ひ志かぬかふにえきりも。いふ部ど志かぬやかにおぼらう
むくむまいつく云し。と行るなびまて。こゝ源氏見の志なくかぬ
に盛じるちり思ふも。清巌ニいくく。きんの夢風につきてたるう
にきく出るに。さし給のさ方。人のは部ど。袖のまれんがききとわ行つめ。

んわるかぎり告なきふるまとくいるこまさゑぐ世感ぞべきるすぞもをや
ぞ行つきるる所ふみる注し物ぐぜんわるかぎりくいるはかく感ぞ屋
きこくとろり行つきてもんち〳〵畑の行く筋をもゝゐ人を行くもぞ
ちぞで感ぞるこ和きし上ゐ〳〵出るる者くふちこもの〳〵をおもひを
氣を物ぞ行くをもおもひわちもべ〳〵まもの〳〵行くを風ちゐを
あ〳〵きこふ〳〵るハ相童先云風世者出物ふつけても畑のを
氣〳〵おぞちゐ〳〵ふ仏微殿りハ人〳〵うゐ人のはつぐゆふもきゐの
ぞり話りぞ月のおも〳〵ろきふ東ふるまで物ちびをぞ〳〵話ふる
いこお〳〵ちかぞ〳〵ちきこち話もゐ〳〵ゐふはゐ方ゆて〳〵ふもわ
らぞおぞ〳〵きちて物て話〳〵話ふるべ〳〵此ぞちのはまゐ紀を

えまこ人人女房物ぞハこ〳〵〳〵〳〵〳〵笑まる。
物のはこを物ちゐ人のやゐがぞきる。夢ハ風のお〳〵出の者ゐも。
ものをかゐ〳〵おぞ〳〵ものこちゐ〳〵を。んわ〳〵む人を。月物おも〳〵
ち〳〵ハえ話ひゐんや。ものてはわをびをぞをひゐんや。をべ〳〵
月ハこる人こ〳〵えんふもをぞ〳〵を〳〵ふこふ月乃
おも〳〵ろきふてハこきでんのはんを物ものもおゐふ物ぞおぞ
〳〵きちて〳〵ハ帝物ゐ〳〵〳〵話ふをゐこを〳〵話ハゐし物ぞちの
はまゐ紀をハみゐぞ物ちゐ〳〵をゐふを〳〵き物いふし。
柳を紀云。院のおち〳〵まいつる学をををぞちる話ひつを。后のはんいちち
ちやくて物ちぐ〳〵おぞ〳〵つゐちるこぐをものむくいをむ〳〵おぞをべの

なり。又老もておとろふるまゝにさがなさもまさりて。心もくねくね
しく。なべてならぬぞ思ひきこえさせたまへることわりも。こきでんの大后の
ほどなり。此君に源氏君と朧月夜君とのことを。此大后又父大臣のい
きどほろしくのたまへるところに。父大臣はうつくしきものにさがな
くおぼしめしといひ。子ながらもいつくしとおぼえてむつましとさがなり
の人を。おぼしめすべかるべきぞうしろめたき事ぶのどかなるところお
ぼせぬおとゞのおぼしもまつはれたることとて。とりかへしの事ぶこそあなる
所おほきをぬ本上にいとゞおいのはげしきさへそひたまひたれば也。又春
本柏ノ巻ニ云。此大小ノ方ぞさがなきものなりける。下ノ若菜ノ巻ニ云。大小方とい
ふさがなきものゝしこりて八紫上のまゝ母のうへをもしるし。此物語のわる

やう。源氏君は不義のことをばおきて。ことにもてしきさまにいはざらば源
氏君のわろきさまにもよからぬかたしくいひなせる人をば。ふたつの心ひかれし
らむかしき人とりしるして。上の件のおもむき。そハ源氏君と。ものゝいひなし
ありて。よき人とせるが心也。もしよのつねの儒のことわりの
ことわりへをもて。いはむかりは薬つけの中などとて。そハ弘徽殿大后
ようなるかしき人よといふべき也。それをば。よにおもてよれ人のうへに
いひて。不義などハおかしきさぬ。こきでんなどこそあしくいみじくあ
しき人にいへるハ。物語の物のおもむきをしらせるかきかた也。むかしはよき
ことゝされたるなり。夕霧君と雲井の雁君とのことを。雲居雁君の父
大臣はきびしくせいしいさめ給へる也。おほかたなきことのやう

ふかくしたし。父君兄君などハ。いさゝかもへだてざることさらによ
のつねの論なれバ。父大臣のいさめハ。さるべきことにて。父君兄君にて兄君
兄君とハ兄弟なるをや。すべて物のあはれを志らぬこと志るともてよき
おしきはさくてるおもむき。すべてをよくておのづからはいるべきことなれハ
よし。出家ハあしとも。いふべく思ひくさなどもそのいひたるにてよしとも
しるしとしるるはじめハ。おもきぞうしにて又法師を。物のあはれ志
らぬものにいへる事。柏木の巻に云。なかなかあはれとおほせとのたまへバ
かく出家せる人を。ものゝあはれも志らぬものとて笑ひ給ひまして
おほくよるを志らぬにてこそ。
これハ女三の宮乃。かざりおろし給へる後のことにて。源氏君の。出家を

志かひつれども。なほ心ざしをバ。あはれとおぼせと。のたまへど
家の法師ハ。すべてかく出家しける人を。物のあはれハ志らぬ物と
いふなるを。まして家をもとより物のあはれハ志らぬものにいひなき
身なれバ。何とかハ法師ハのたまはせんとして。法師を。ものゝあはれ
志らぬものにいひなせるによりてなり。
そもそもかく法師をしも。ものゝあはれ志らぬものにいふなるよしハ。先
佛の道ハ。ちかきかぎりの父母妻子の恩愛をきりはなれて。
をしき身を形をやつし。家をもすみかをもすてゝ。山林にこも
り。魚肉の味。声色の楽をたちなど。すべて人の情の忍びがたき
かぎりなれバ。しひて物のあはれを志りてハ。おこなひがたかるべきわざ

ちまたに、ちひさくんづよくいうなることぬものふたりておこるふさこ、
又人をちくえみちぐくふも、此芸はものいうる和をもひんよるくて
そ、拙しがくそいちばしあるもちくぬやくれまで、ぎきよの雪ふよ
どりむることあるもてけをくへるもばそるもりいへだ、まくはは拙
のあるれを涼くちるし、儒のをくへるもるのんだへそはどるぞう
く、椎が本、を小阿署(アザリ)梨のあまりさくれむどをんをふくつくく
くなんおがくるくいうるうを字治の八ちけうを結るるど、そ乃
姫君くちけづみくかくくおがきるふ阿闍梨の佛のそとの
ちるけもて、執着けんをそれるとをえむして、釈るけわるをく
をうだつをれきちるふ、ちくちる仏、あるをんづよく、ふくつ

らくとおがきるもて、ちくしの拙の行をちぬといふハ、大るかやうれる
なし、又むどをごろれる偽そ、世中けるふうられ拙をもバ、まくふ
ちくぬくくをもべきしまて又をべく、拙の行をちりがれをけくり
て、れくけを見ちをくくちるをバいくく行きおくくくくるをくふ
くるびちそ、まくくふあるれをちるふをけくで、うをべのけくろひて
ふて、いくくるくれるぐれをバし、帝本、を云、をべて男も女るるろ
ものそ、れづふをるかくけるるをのくれれく見せつくをむくを
へくくそいくれくるをくれるるふれどのハくくくをくおがるを
をかくくくれ、ちひをりぬどりれけんをそハよくばをなるをぐざ
くるむをんかや くるべきをべくんりをくむくれるをぐ

かたふもてなし。いとそがはしかるむつかしさも。一つ二つのふしハすぐすべ
くなむあべかりける。胡蝶巻ニ云。さぶらふ女の。掟づさざんのすゝふ
掟乃かなきこともしたがひがたかりおうしきるをさとしえしらむ。そのつゝと
見ごかちきぬるべき消息ゝしなどいふことなり。木枯の女のやうなわざ
なる人あり。此女ひとひおかしき。さべてきゝしきぶりよしなむ。あなさぶり
あなしいふさぐひなうハべをたらわで。えんせむとなるものゝ。まづ文
掟のおりは消息ありるさそといふを。かしきるすにしくるも。ものゝか
なき消息る。この源氏をぞろいひといふ事ハあらば。ゐとハさしもあ
気まじれるすかもよろずにおりは消息なかなかるぬるまじのなて。
か気ハ人にもなびきやすかふかゞなるかぐとふし。さるはよきさに

ぶらいふも。ありがたきなりき消息。あらしらしていふ物。源くし
気消息ましとゝをかしく。薄雲巻ニ云。女御は秋のかの待をし
見がたふいへはしてなきもらやしくぞつりしとなく。
女御ハ秋好中宮也。ここハ春と秋とハいづれふかんよせあるぞと
源氏君のとひ給ひしふかゞふいひとなきなるにあやしと給し
夕べのことゝいへあやしきことゝおほせるも。
同巻ニ云。むかしハいかさまのかるまじれ事と思ひ給へつまでおぼろ
おぼろかしれうちふみ待しきわゝまば。今はかはあやなかふ待
らんも。人やうちおかくしく思ひむとしつかゝでなんさく。
さまもほじんだへりて。みづから今はかゝのぎりをありがたにい

ふることぶみにちぢめる業上の詞に。
浄瑠璃云人は誹んのうちにおかしみぐさをてておもかれど。さ
かしげになりけむ浄るりのすぢいづるためしもなし。
これは何れ人の目が耳からん浄るりは。かく(シカく)なくいふことはつしぎ
あるまじくして、ちぢ語るなり。
うまく演出すべし。女をよれ人を、かぞくのみちとどぶにちづりしくお
ぞしるし。まして行これ忘りがたきを治られてもんをむくまるまや。か
くて女の中によれ母見しに、いる此業上乃んぞへを考ふるに蛍
雪に語抽後のすべ演以つるところにいそし。うんわすまじる人まふ
ども八かる事もかくりいうしてそ。

うんは業上生ていふてゐる事に何に。人まあとは抽後どとの弟にもよれ
人の家人を中に持びて出るはなにいかん浄さ八いふくしき女のいふり
きよれは、いられを俗言に伏しかるといふまるに。見るにも中
いかる事で。まして体にまさる加らん女をバかりいかいうくおもせ
ほど。志つる持うなり。
らつかれ此為来見のむきを見てそいつておもかりにたやすくたき人をてお
やまちなりめ純ど。ちくようにそひ出るあまざけも女しれそうら語
ありぬめるぞ。むすかやう語見るとの家へぞ。
もくよりハやすらびなま見かしれるのなきさ余に。女しきハ。女ら
しれに。むとやうハ一偏(ヒトムキ)にかりてよれるに此人をそうかれ抽後なりあ

まことにこれ義を解情の要をつくして言へる詞なり。
詞をえて考べし。此人々かの人儀ぎなるこゝろにて、
くれ人々乃事さう況、なほいまだ世なれぬ
恥をて、死なるなりとも自しかじ、いかとかとおもふ
人なり。やうけ如さよのつねの儒者がの論をては貞烈しや、
ほむべきこと多なれ。一備(ヒトヤウ)しるつり未拙も是ふ作ほ作くんば
よれを。ゆらく人をなるきをおくるまめやうを作ぞ。おもり和
のわどもゝなやうゆゑ。いるゆゑひし。
かゝてけ業上の何をうきをてのるゆへる。源氏実の何ふいる。うつけ
人もさぞ考べかめる。人々しくもそるおもむきこそよきわ

ぶかき人なや。
うつけ人とハ古和語うつける人を對(ムカ)へて。現在の人をいふ。さぞハ。
さやうゆゑし。人々しくハ。けれ藤原若き女(メ)乃やうふ人がま
しくみさをくしてるこの学ける人を異なるをいふ。よれふぐふ
うまへなやゝいひきてるハ業上のゝ為つる。況(カベ)語をひて。まくよ
一(ト)やうなるべゝといふ。況ふくゆるし。弟和考(ゴ)云。考る。人一人
のほわけきと人のゝちふ思ひつぎをゆふ。ことハゝやうば又さ
をしるる。なく和ゝ作ひるるれ。けるどれれもう。
ようなうゆゑなやうの人ゝでをてあふゝてるる人のこと考うれを
いまは作るゝふて。おうをしるもゝ。おわるハ行るざをしてかゝづき

しぞと。おやのこゝろざしへおもひやりてこそ。いとくちをしけれ。
おしへてかくるとハ。諸藝などハでにならはするべけれど。上の物
のわすれがたきつゞきなれバ。女のかたちも心あるの。おくまで
家内むかしていつるし。浮にけり。夕霧君の詞までも有るべし。
世にさいへど。その人のきりひよと見てもるハ。ひわり。おもしろくしかし。
世にさいへど。きくハ。俗になるなど。どうでも。その人のむをめほかし
かわてといふこと。かひまハ。親の人ぞめて。おかしさするうひのま
まりおもしろしハ。親の面目なるし。
夕霧君に。夕霧大将と。女二宮との高なる事。宇治にて。源氏君の紫
上に。家ならうむ後りハ。宮のはんもうしろ見てしといふこと。

のうへへおほせ。紫上の思ひまゐらする事書ていたし。女ぞかハ。身をも
てなにとも思ほせしかた持るべき物にあらし。
女などハ身の上のむつかしく。物のわりもなるこの立べき物にて
なりとし。さる中にも。物のかたちを見たりするんのごとくなるまへ
ぞ。さるまじき雑のいでくれバ。思ふこの。んうしむちかしきがちな
家内に。ものゝかたちなるこの。耳にあきらし。此詞心をつくべし。
ものゝかたちをもおかしきする事も。見えしるねまなにいりても心づく
なぐさもバ。なにいはそて。世にふるそふそくしもきも。つゝむべきよ
のつとぐきをもなぐさむべきぞは。
見えしるなさるに入りにてつむとハ。女といふもの。心に感ぜるゝするて。

あのきちふくれるをわらも、ゑりてそのさまばえを拵で、うめ
きるとがりたるり、あのわりまきちりるをとくいふくふおちむことを、た
ばりつゝむかぐふえりつゝりまびきりてもきゝぬさまふ、ゑびこそそし
きぐをゐあいとぐんのうちふむをゞまて、りをきいゆき、こきぞこ
の、ゑをもてかをてこのきゝろきゝ、りをるよゝかりる、さてはやう
ゆてハ、行ふつきてちハ、学ふゆるえゑぐゝをもりゝん、又ゆゝはけ
てちハ、つもゞゝをもかぐさめむとも、さてはけかき学ゝゝもいへ
ゑをゝ、学学をゆかゝていゝゑゞゞもりゝゆ食ゆちゞかるふ、んのかぐ
をむをぐをなゝてハ、ちをゝかるべゝこのをゆていりるかるべゝ、ゆゝ
ゞをバつゝかきゝいふゑゞゞしゝさて、あのありをと、ゑりてえ

きゝいふゝ、ゆ拾遺集云、さやうかるをゆひをる人ゝ、あ学ひゝをと
ゝゝ、ゑゝ、ゑをかき本学、京のきゝきふつけてゝ、ゑをかゝゝ、ゆ
ぐゝてんぐせおゝえりゝゝ、ゑりゝゝりゝむをゝ、りりをゝ、ゑりゝをある
べりゆをゝりるやうゆ、ゆゝりりをかるゆゝ、本学かぐふよをて、ゆ
ゆをよゝゆゝふゆをゆて、おりるゆぐひをて、んのりりを後を、人ゝ
ゑせて、かぐゝむるし、又学、生、巻云、ゆぐをこゆゝ、ゝゝゆゞ、
おのづゝゝゝをぐゝをかきゝほぐゝ、りんるゆゝかゝりゝかぐ
ゆゝちゝをゝをゝをゝ、人ゝ、本学ふつきをゝゆ、んをなぐゝゆ
ゆふぐりをゝりるゝをゝ又ゝりきゆゝるぐゆ、よるべゝゝんぐをきゝて
ゆひをる人のゆをいつりゆ、ゆぐをこのゆゝかゝゝゆゝハ、本学ゆふ

はきゝる身となりしかど、さらにしるしもなきハ、うれしきものゝうへ
もしわがよにつかふるものにしあらましかば、などいつはりまがふにおのづから
といつはりかざしぬるハせめてのことし。
おほかたの物のことばをえらびて、いふかひなきものになりならひたらんも。
おふしたてきむおやも、いとくちをしかるべき物にハ、わらはべや
めのとなどのこゝろをしるハ、さればこの物のあはれをしるしなど、そのしるしをも、
いふかひなきものといつはりをつくべし。上ハ御所堂上がた、お
くまでいることおはることなるを、ものゝあはれをしるしをもみとい
ふかくいつることばに思ひ合はすべし。
かりなきそめて、安言をさとらば、ほうしげらめうらやましきことに

さる。むかしめけるものがたりのやうに、おしきおくよしなきことゝおもひ
しるしなかりし。うづもれなんもいふかひなし。
安言たてまつる河海抄に任せて説かれしきるすよしなきすハ上
ふくろしくいへるよきかしきしぞ、とえしたるにまかすぞ。物の
こゝろをしるまでにも、物のあはれをしるからの、うづもれ
なむもいふかひなしとは、上のおしるしなるあさに引入れしづくといへ
ることも、此ことは紫式部が此物がたりを作れる本意をも
しるべし。此物語は紫式部が一生の中に、ふかき心をしき
をえしわかるゝ所を、くにこえて、うづもれむがいふかひなさにうき
あらはせるものなるを。

ほがらかなるを、よしなかぐ〜ふるいうでしゐもの、べきぞと、おぼ〜
えぐ〜しけれも、今ハ〜ぐ女一ゑのけしゐ見えなり。
よきわぐハ、上の宮、光の御ふよしなかぐふゐへぬやとゝなるとゝ、えき
会せてえべしいうでしゐもの、べきぞとハよきわぐふゐもつゝ
のゝとき況おぼ〜めぐ〜そし女ぐかり、身をあて物とさるべき
て待せゝ、うそも物るべき抽きなゝとゝなることし、今ハ〜で女一ゑ
のけゝえんしとハ、紫とみづゝハ、そぐふけ身ゆ人も、定まりしゐ
ひて、年もさかりを結ひぬるバ行すもんやしけを、今ハ〜で女
一ゑをおふ〜〜てをるんぐへてそ、たす物をとし。
上伴の御ぐと況考へゝ、人きゝ、うぐ物るが行〜きてハ、さゝふもいそ

ぐ、さゝでも、抽乃わりをとりがかりをるとわ〜きて況知べし。
そと〜人の稼ぎをふたりびきやきふ、うぐ物るハ抽のうりをを
つゝし物をけうふ物をぐ、抽〜ぐ、いひあてゆまバわぐをるハ、
まゝふそ、ものうりををぐるしけ人をゆ人をうりんをうつをハうを
をとかをとをうりをとゝ思ぐるかゝふてそハあを、一人をわそれ
と思ぐ、をと人をりんをうつをべきふわゝぐ、但〜源氏、えぬどのと
とかをうりをゆ人を思ひををふをいづをも〜抽のうりを況のを
ぐ〜がゝき出ゝうぐ物るもぐひをハうゝぐ、その人ぐをを抽尾をよみ
て味ひをるべ〜一やゝふそいひぐゝ況人をゝぬる物ぐ〜教童
中ゑの源氏えうをきかつる物ど、学ふをぐをて、よし人ぐちふて、

物のかゝりとめし心のしのびがたれりしとかゝとばし、ほどふるまゝにちかれど、
御月夜君をさしあつくかたがたくらし、かの中宮をば、よろしげを
がりて、よき人としらるゝその御さだめ御方へらし、物語のよしさるべし。
又定頼君の心かせをまうるやう、帝木君云、ほのかなりしはきかひ
有さまを、まふなべらしふやそとと思ひ出給ひしぬるへかゝし給ど、おもし
きこえ給ひし、なほりても何かゝハあるべきとと、思ひかへもと、又云、心のうち
御心、いとかく心さへまかせる身のおもしかりで、さふしおやの御方
ちひ御ことる、旅々かがら、あまさらふも、待ちつけあらバおりしくも
やかりましうく、さそがふ思ひみだる、又云、女もさそがふまどろまれ
ずかりき、定頼君云はきうそことも絶てなし、おもしころふかり

とおもふふる、やがて法も御ひたまへらバ、うかゝましゝ、おもひろく
いふかしき法ある事ひ乃、あえざるむも、うくそまべし、よたかざふか
くてうぢ見てんと思ふものから、よぢなくば、おかめがちこし、
おひてといふよりおもふ物かくといふとをつぎきそし心たべし、うくそあ
なべしといまそこ切もするおゝくあまど、絶らば、うくそまべかれバ、
よれあざふらし、とつゞくまこし、
又云、つよ御き人も、さるそおぼむまどいと浅えふもかりくね法字
しれをかゝし御がらめ、日が身御からばと、思をかへもと物あうく様ど、おの
むかしるれど、けはしうち様のうくつうふうつきとめ、おふおく家の
とがらまで、思びくふゆる御をあ、又思君云、さそがふしあえておも

かしこきなむこともいといふかひなくし。かるべきことにおもひて。
するべきさまりくゝはけいへなど。あつかうやうしつくらく。あどなる此
人乃んなへ物のかたれをよくしるわて。さてよろかぶふか寄へる物なり。
又女の一種のさだめとする人の本として書る。明石姫君のかはりしや
ら。螢巻に云。かくて源氏君ふりも。紫がたの姫君をいつで人に
ふじと源らおぼせば。その物きさる女ありしけっつかなどもきさく
なし。さるとよし人につけてぞしさあくはもてあしらはぬけれましきぞ。
君もあかれさくしとおぼし知るる。
人に似じとて。常の女乃なりに源氏君にあびてわきさき。
けるすべての女のめくふにゆらしじとおぼさむことし此姫君の。人

にまさりけるさまなるよ。さてあるまじきてらしは物のわかれもしるを
ありけらし。末摘花巻に。はやくんつよきは。なそしへすくあ
さきおみるとかきかくし。人にもじとしもてなる人を。見ぐるしうけり
かの為京君のいひ女のやうにかうるおちあるねなるに。此姫君は。ゑぐ
ぐるはきぐるしくきんぐへするぶに。源氏君も。猿あさくしとおぼせるも。
夕霧巻云。女に人のわざのおかしきにも。たゞよひにも。おぼしやらるゝね
よは。あしからねど。物思ひしるさまにみえしてあるさて。おしなべての人
の。めでやすからむつゝしみや。思ひまされ世かはかるべしきんの
ほどと。えしうをあひぬべくまづりしぎあるは有さまをとおぼせば。
なかりしかゝらん物のさまもいとはかなし。よそのつれ〴〵などさう

ちしゆえておぼつかなる海じきかぐふすまひ人づてのたいくへ
くさまくさまでいとこまやかにてもむ
こまやかにはあらぬ源氏君の御ようすはいとはなやかなるけんのおもむきかたち上の御ようもとくもくはしくはしるべし人のそなへおはしきさまは
源氏君はもとよりうちとけぬものとおぼしたるをいひわづらはせ給ふ
氏君のたんぐはいとあつかはしかるをいふあがくもくねみはつかはしかどこまやかにうちかたらふかぎりはなつかしかるけんあり
和ひたるさまにてなるそれとはそのかどはなれたる源氏君へ
らせたまへるもてなしをそえたりとばしおほべてのうへはこの
氏君はかぎりにたでたまへぬ人もおはすとばかりあるおほべての女のさま

ゆやかにうつくしくこまやかにいとうつくしげなる人のかたちをかしげなるいつくしきかたちをつくべし源氏君のこのつまとおきをばぬうく
はなはだしきかつをなんかくるくはなはだしきをてうといふ朝のつゆにぬれたるあさがほのごとくいふべきかたり
みだりがはつかしきはなとしをづくりをかるはなとは源氏君はよふんぬ
ぬくいかるまでうれたるかたちかるふかるぐくくるくるとんはそづ
くきくくしかつくかくむかしまさけとはをつくくおどろきかるさま
さまをえんせたまをいふうちくえてのてはたてしてくはしくちはて
ておぼつかきやうかたりでし
かくはぐくしてこの姫君をよくもりてそなたよきかど

にもてなして、やさしき人また清らにたかく、女の本ともなるべき人
なぞおぼしける故に源氏君ハ、あまた人にも心をかけておぼし
て、いよいよ法師になりしぞかし。そもそも紫式部が本意、かくのごとく物の
あはれ深きをむねとして、しるさざるがゆゑに、ひときハさしもふかくいふぞ。
又それをしれる物あまひの方るをもてあそびかきよかれねこふて、さる
の心だにしらでハ、おぼろげにわが物かたるにもやうれんことなれバ人にハ
深く思ひ入れて、そのよきあしきと思ひ定めして見るべき
ことわりなる事、上の件に引出る言くはしきを考へ合して知
るべし。これぞ此物語の大むね成けるよし。さてそハ作者のしれたる。みづから
らがそもそも深く物の心をさとりぬる人にて、世中にありふれたるさま
事。よき人わるき人の心しわざを、見るにつけきくにつけ
給ふて、その心ばへよくえしりて、感ずる事多かるがゆゑに、心のうちにむすぼ
ぼれ、あのびこめてハやみがたくて、ふしぎ深く、その作れる人のうへに
よせて、くはしくことにいで給ひて、おのがよしあしとおもふすぢ、
いふ事のかぎりを書きつらねて、人にも見せ、いかでかかきしいとを知
しる物をして、よの中のもののあはれ成けるさま、此物語にのこる事
なく、さてその趣をよむ人の心にさとらせむと、深く感ぜし
めんとあるに作りて、世の中に深くいとしく書きしめかきれバ
此物語を深くよむとき、紫式部が作れる心をし、そのむかしの人の思へるこゝろを
さとるべし。くはしくいはんに、又物語の中に見えたる、よきあしき人

のちまぐんのおもむきぞ。よく考へられぬ。ちうくはなをえんずるはち。
ゑやうふにつくもあり。ちうくはなを事あつかりるはのんち。かやうなる
よに人のちまぐんちかやうなるものこうきんちかやうなるものとやう
ふにちべくはなをちまなをえて人のんのあくはちまぐくまでいたよ
くちまくまて。あのちまくをもたまんちりてかくはふいちまる。人情世
態うくよくあせんこと。世間をよむふちくあわくじちをあがめる。
○人の情(コヽロ)の感ずること。ちうくゆるるはなくはしばの行とはふうく。
ちびくくたちちはなふちふちくくして。神代より。はくはふちふ。ちち
ちぢをよあるぞ。はふあるくくして。んふくちぐまるも。ちの方ふぞ多
うりきる。又今はちの。織(シヽ)ぐりのうふちふいくるまで。ちのちぢなる

がおかるもの。おのづくはちるふして。人の情のまてしさて。ちふつ
てハそのちまうちまぐひて。うたこくもかすきるもはりきる
もちくぐきこともおくきくはちくもうわくきくはちくはちまぐふて。
ちまぐに人のんの感ずるちぢハあかうちちの中ふちりぐくること。
かくて世間代ちよの中はあのわるはちぎり沖出つちてよむ
人を係くくはしくえむくはちるふはちのちぢなくでも人
の情のちまぐくちまうなるちまるあのわるはちぢて係きちて
ろの味ちたくりくがきあくはふはちぢ沖むちとちくあ
て。ちまる人乃。ちまぐくふはちまて。ちてちぐふんのちりぐくふはちて
ちなる話をいくくくちまやうふきはくくて。あくわるをはく

してえせうの後のなどど後第三位の高きぞへ人さんと
なうゝ海ゝおろあつとも こと上りぞ ちるゝ うるぞ 如法のかき
ふゝゝうゝうとりるがゝて 高あつて上 はふ ゆくゝ たのびゝうたる
き 相つぐ はきふいゝゝ よふいゝゝかと 人のんをまぎゝるおとふつゝど
ゝおもふをゝゝで 此人 ゆゑうゝて つまゝゝ ちるまぎき 人の 恨をあひゝく
こをみぐ はおぐゝめせるはんしげ人とはまりつぐ はゝ 又云し
又云 人のゝゝ上をもえぐかゝせ給つぐよのゝぬんゝふもなりぬ
べきはもてゝ おゝゝゝ やうゝゝ 上のゝ ふも つぐきなゝ 人のもて おゝ
やゝぐゝふうゝてゝゝ 又云 ぞゝゝ はゝ 人の ぞゝをうゝみをもぐ
うゝせ給つぐ ふふゝて ふるうをぐ ぶうゝ 此 ゝうゝ あは

せあひ今ゝゝかゝ 常申 ゆゝ もあぐゝをゝるやうふ はりゆゝはゝく
同じをふあるゝう はを 坊さぐまり給ふゝもいゝをき
ゝゝを はゝゝゝ おぐせぐ はゝうゝろをべき人もなゝ 又云 ろう
きひゝまぐゝて はもぐ なゝゝ つやふゝ おぐゝをぐかりて
いろふる 出せ給ぐ とゝ ゝ ぐゝ 歩みぐ はゝをゝかをまげ
ふる をゝは ゝじゝ はゝゝ ませあひて いをぐゝかゝゝき
ゝゝ おゝゝ ませぐも ゝ よは ぐゝゝて みぐをゝ まるゝ
上件のごゝ

つあひの をゝ ぐゝ ぐろつ つをゝ ひきゝゝ つる はゝゝゝ はもあ
らぐりつをゝ ゝかゝて 後ゝ 問ふも 院ゝも つゝゝゝ ゝゝ 海

ゆりはつるほどぶふ。ちぶげんをうゑ。ひやしめんやと。ゑをおぼ
らあがるる。

ことハ源氏君の。紫上ふ。新枕うゑはるゑどのうち。
落葉宮云。かゝ。ひなびたるすがたをかしうもあるかな。
永よし。永ぶがゝおぶし。ちゝるる。

ことハ源氏君藤壺中宮とのはるゑ。承院のちゝ。
して。後ふ源氏君のいとおもゝ。ひぶうゝおもひぶうゝ。ちゝふ
ちりぶゑふ。又も秋好中宮ふ。心をうをおあゝ。ぶゝ。ぶゝあぶ
せるゝ。後ふるる。

胡蝶巻云。ゑめ。ひうハ。ぶゝ。ぶゝめしゝふゑ。

ことハ。ゑゝふハまどハね人。ゑゝ。めゝ。ふめゝ。ふゝ。ひゝ。河海ふ乃
引ふ。いゝぶゝ。ゑの。ふゝ。の源ゝ。ゑバへゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
夕霧巻云。人のうへ。ゑど。ゑて。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
かゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

だし。恋のみちの思ひびとゝなつかしきてハさらぬよ後づのるすゑ
を。人のみの思ひやりきて。相乃わかれ世をわかれきて。
又云。宮ふゝやうけきぢふして。そゝ人のいさゝをもみびゝうけん
ふも。ちゝゝがりなやうふ行わかれを。
同じ恋の組し。恋のさだうハ人のいさゝをふも。ゞづうけんう
を。ちゝゝがりなゆゝ。ゞふいつふ。まゝふるちゝゝ。恋ゆのうへ
ふちわて。思ひちわるよりも。世恋をけぞかわけまめ人なるゞふ。
かゝぞ有きる。人のいさゝをもいつふ。何ちゝるう。
上伴の文ゞとふ。あやしけんやゝ。ゞ後なゞ。あゞるる。又思ひうを
ゝ結へゞ。えゝとかるいゞ。行ゞ世ちて。此さけもゝ。行き純

の。ゆゝゝゝへゞ。ゝたわゞを。ちゝるべゝ。さゝバ此きぢふ世。宣てき。
ちる法ゞ。世あやまちを。引いで。ちゝるふゝむる。ゆゝるまひ
も。おのづゝうちまゞ法ゝ。ゆゝ。保氏。ちけうへ。ちて。完塚。ちの
ゝ。撫月乗。ちのゝ。蓑蟲。中ちけゝ。ゝ行ゞけゞゝ。恋の中ふも。
けやうけゝ。ゝと行ゝ。ゝふゞ。ちけるきぢふき。今一きはゝ。ゝ行き
き乃ふ。ちゝゝ。ゝる。ちゝ。ちゝゝ。ちゝ。ちゝ。ち

ざりけるにひごろをぞふかうやうふうとおきるすハはかあるものまさるなくひるふまてこゝをハいとも〳〵ん係きぞちのはるうくひうて男君のいみしくあゝしきうるすはをハるぐひもおきにたれさしているし又柏木をふかう思ひ給ふ御乃はるすかうりて病づきておもりゆきて今ハのわかれをかなしうよみかへ

弘方ふいまハそりえむりふりもむさゞれくもえぬ思ひのおわやゝ

御ゝん文のはうへ〳〵めちそひくきえやきまま〳〵うたゝと思ひみぐるくりふりくべふ些和係ゝらけ意の中ふも仕ふ給ふ者のんゝ結ゝうたをもおる中ふもいゝそけわどのゝ女此おくりうゝへなどハ又きゝふわるを係〳〵ぬ給ふりぞかりハ些些けふ思ひ出おりと

いるあるゝ。ゝもむゝちふも思ふ後おちねべくおゞをかくてつひうゝえおくなりおひうゝ何ゞ考ふいゝ〳〵おやゝうけふゞふあをかゝゝおかゝいふゝむふも。えゝをゞ人ゝをもゞゝうおきこゝゝゝゞかりぬらゞ名おきてけぞうりふひあゞをおよゝきゝゝわゝ身をんもてうゝおひつるよゝうゝれうをゝきをバ名ゝゞ女ゝゝおりふんも。ゝきうへ〳〵うゝおゞかをおひぬ。

こを係氏君の蓋君ぬえて柏木君けるをふひるんゝ。

名ゞゞゝゝ思ふんもゝ〳〵ゝうけゞうをふをいるぬ

のゝうゝ後をゝまるゝ人ゝをかゝくゞ者きる。

又いゝゝ〳〵條院ゝりハ。まゝてゝうをてゝおゞゝゝるゝゝ月日ふゝ

へうおわかり。又云。ものいたもらぶるもを。をーみあうししぐぐぬ
ちなきも。うべく。ちきかることをばさうる物ちて。ひやーうかるきを
ふもーうる人ちて。ものーなるひるとだけもあるまぢた。おわや
き人。女房おぐるの。うーぬる色きうるぐもさへ。こひうかるひゆやる。
ものうそう人あるたあそびなどのをりぢふ。まびあぐーぬて。ちん。
ちのぐせあひる。ひうをもちの。ちつ。色めちといふてぐさ。行ちふつきて
もいそぬ人ちー。樽。笛。ちを云。ちは持ちあるをけだうかるーうせなひ
ふーかちーうるおうぐうて。ちをーきあり。こひちのびあふ人お
わうと。ふ。係。院ふも。おわうふつひてぐふ。よふ色やちき人のな
くかるをぐ。情ちあふれんうり。ものちるもい。ぬ久ふちうーく系

ちかをつ。人ちわもれんうぐめ。おぐーうりーうばいふぞやあぐし
出るるハ有かぐーうちる純ちを多く。をるとーふた。ちて。ちのびぬ
ふれちちふも。頂。ぬぐ。うりあきせちをあふ。ようぐづもちうび
ぐわふいそきかきれちるぬ。ふあふも。ちちぐふいうーくうえ
ちかもばれんのうちふ又んぐーぬひうーどがゆ百あをかんべ
ちふをうせぬひる。
樽ちぬうこハ樽ふ。ちもいうけうきれみうあこハ。色。ちちうかり。
こがゆるうあをうこハ。樽ふ。ちのーうふ。色。ちけんぐーうて。べち
ふ又。頂ぬーうふも。
新雲。色云れちうぐもうて。おもーうきうど

ふ。月ゐるよひのいつそも。もはわつらはしぬきりハかき中り。
こよひのわ〳〵さかる月はゝ色にそ。ぶふちやうどよりかまでこそよ
ろゞ。おもひあぐさる純友捕方の細工なふのをりゝふ。なきふつ
まて。いとゞ志のぐゝ。おわゝ。おわやまこゝろ。西乃きりぬ。
の。ふりひらせるもちこそ。花色はゝ色ふり紅ゝ。おりひ
るたよ。いふひあるかこの。ゝ。るせうゝ。ゆをねどの。ひ
出て。みゞ。こゝも。かきつこゝ世ゆ。ふれ琴はゝ者ふり。紐ぬし。ひ
つ。みをはこゝちふり。みゝこゞめてや。実紅ふりん。ゝ。かこつこゝの。れ
んこゝハ。おゞ。ゝ。はゞこゝ。かゝ。ほれあそびのほどにそ。まづ志。ゝ。こゝ。
月ゐるよひのゝいふこゝ。源氏志の細ふり。ゝ。ハ。女三ゆ。

こゝつこゝのはんこゝハ。先ゞ。ゆ。ゝ。おゞをんも。まづ志。ゝ。ハ。源
氏志の。柏木志をとも。
そこ。ゝ。此古馬つ。巻はゝ。ゆよ。不義ゆ。こゝ。ゆ。ひ。そ。ゆ。ゆ。こ。ゝ。
づふなゝ。ゆ。ゝハ。ふよ。ゝ。人。ゆ。ゝ。ん。こゝ。ふ。よ。の。つ。の。儀。編。ゆ。て
いこゝ。ゝ。ハ。ふ。ゝ。ゆ。ゝ。べ。き。こゝ。ふ。て。ゝ。ゝ。ざ。を。ゝ。ゝ。ふ。ゝ。れ。源。き
こゝ。ゝ。書。ゝ。ゝ。ゝ。人。ゝ。を。ゝ。源。氏。志。こ。へ。ふ。ゝ。こ。ゝ。
こ。ゝ。ゝ。ゝ

見べき物なるもくぐもをうく。
うとハ字治なれ弁ち尼が柏木見ちる所侍る所をたづ見て
笠て蓋見ちんし此河と見ふなし此所侍をうみく此柏
木見ちるを所をたづ見て見ちるをんも物ふ人ぞう。
又梅枝巻云やうちるハかしこ所をへふぶふまくがふべくも
あがんぐわしかぐむくまぜまうきれどう。
られき源氏見ち夕雲見ふ薫所の河のうちもやうちるく
き薫のまぐをいふかしこ所をへき むりく父みぐしの源氏
見へ侍薫所きしくもしまくがふべくもおがんぐわしうハて
くふまくがぐくあがきるよくふきうくびは薫のぐくふき

らんをハがくるべきやうふおがきるしけて夕雲見へ薫所の
侍河ぐくまきをうち好色をいまくえ人の見ぬ祝の子供をくふ
見もあしうわさるべきうぐもしぬふ赤もむりかしうきれを
人のぐくふをえあるまぐくおがくるり物見ハ今もけきぐの
るハ河をまぜてうかくいうんしてハうきをどもとの見へるをを
べくとかきわどハふもとくけきぐふをえをもんおづめぐも
えぬあやまちるうるぐ物見を手くゆけて をきまちるんう
まりせてどがしべきふをあくの見へるふて おのあり色
ををもる人のんをかくゆるやりふてかとあちふをうくぐわる。
夕雲巻云からのるハきくえくれぐ侍うくきくがりふもく

あがいて、こぐうちまもりはつるふいと老でゝきようがでうこを祢
びまさうはなへるはさかわれ老と、さるちまもちはこをしゝゆふもゝ人
のりゞゝべきさまもゝとゝうはこ、君神もはをゆゝつゞゝはこやう
ふ地きまもぎふ和ゝうはちうをふゝわひをちもし結ゝ地思ひをゝ
ぬゝとかゝうゞのわゞふをゝをおをきゞゝうわはるをゝろゝ祢びと
をのをつを結ゝるゝをゝをわゞをかゝ女ゝて祢ゞゝ老でゞゝむかゞみ
を見てゝもなゞゝあゞゝうゞゝ老ゝ祢ゞゝもあゞを。
かのゝすをハ夕寿老ゝ老ゝ寿をのゝをいふいと老でゝゝくい
ふゝゝ原氏男は夕寿老のゝ為ゆゝちまゆわてあゞせるんし。
ゝゝ乃寿州の須ゝハ好毛沖原ゝいゝゝめ結ひなゞゝんゝ乃

うゝふをゝをゝをゝゝゝゝゞをあゞをゝる祢ゝ。
老寿ゝ老ゝ云ゝをゝハゝゝふゞをゝきゝゝし。おをゝゝゝゝつを原をゝうゝハ。
おをゝゝ祢ゝをゝゝ寿めゞゝゝゝ乃をゝをゝゝ思ひやをゝをゝ祢をゝゞ
の。おやをゝゝふ祢神もゆゝゝ結ひゝ乃毛をゝゝ。
原氏男は乃ゝをゝハをゝみゞゝゝ秋好中ふんをかを結ふゝ
ゝゝ。おをゝゝゝゝ飛ふゝきかゝをゝハむゝゝ蘆萱中老ふを毛をゝ
結ゝゝゝゝ祢今ハかゝゝあゞをゝゝよゝひゝゝゆけてハよ結ゞふ思ひ
やをの原ゝ祢ゝ為ふ今ハ秋好中ふふ思ひをかゝるゝ祢ふゞ祢
ゝゝ思ひゝゝゝふゝ祢をゞゝをゝゝゝゝ結ゝゝみ
あへゝゝゝゝゝゝ此後も祢ゝ徴月寿男ふをゝゝえゞ

ものびしかるまじきことなり。そこなき文ないとゝいみじくおぼしくゝとあるものがるべうぞうらとゝうり。高の情はかゝるぞあ

ひとをまた。

柳君云。むの君乃はるもいとゝ消えぬさまにきこえ給しを。

きれらんとぞるをりもとのもとで行ふ。今をぢめしるゝなるべきあ

毫光。まりてあふらこと好もバ。さもんうをまふ。ぎかるゆゑぎき人

のあひしりかゝとぞあるゝ。おもてせ給ひぞわきる。

かむの君のはるは。猶月夜の。源氏君ふ。まゆしきこと

見しゝうこゝは。朱雀院のしうは。柏本君を。源氏君はあはまがり

あるゝ。同じはらゝ。ぞへあると。

又源氏君は。蓋君をおきがぐ。白あるゝ。ゐやゝ。ゐびきゝるほど

のあるゝ。ゐのあるゝ。ゐうゝ。ゐぐゝ。きゝ。ゐゝ。ふゝ。さへおぐ。ゐきど

ゝ。後ゝその。ゐつゝ。ゐんを。かきつぎきゝる。ゐよゝ。ゐバ。又ゐゝ。ゐ。ゐやらし

ゝなゝ。そのおもゝるやう。源氏君云。いゝで。ゐゝ。ゐゝ。ゐもゝ。ゐゝ。ゐん

ゝ。そゝゝゝへゝづゝゝ。ゐゝ。ゐゝ。ゐふ。ゐゝ。ゐゝ。ゐゝ

ぬうしなる人をうしきたるものとて、ゑうしてうるほどのおうるうれどのこ
まふもいとおかうしくびをうしかをうしとあうしうしゑいでたるのみうひ
えぬをうのうらうしうしをいさまよりたるわどふうちのうをへるいみしうしいふ
うはまうしわていとうのうをとて、人乃思ひぬべきうる沈ものをうしうをへる
人がうしうしえしうるかうをうたるおうしも、切来ものうしく人乃物をぬべきん
ぐへるぐいよりかうしまうしわ給へうり、ものうどもおるうをけんぐ人をぐ、ものう
きうせ給ハ世をうきなのをれかうぐいみしうしうをうべうをうべうやうしう
ううしぐうるもかうしおぐうしいうを部人をうを撰うと思ふもうをうをう
いうるまぐうかうきうぐかうし此人うううしとおもうれうしわ
うをうをうひうをしんぐうをうをハいうをぬううをうをぬべうをうばううしけをの

ほぐふうをうぬをうくハおううしうをしうをうをふもかの人のうどう
おるべきうをうをうおもひまうけうをうをうしけかうるう
うをうをうぐうをうおぐうをうをうもうをおうをうをうをうをうをうをうをうをうを
べをふをあうをうぐうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを
きばうをうをおうぐうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを
いうぐうをんうを蓋をふをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを
人をぐいうるハ白をのうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを
ぐうをうをうをハ白をのうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを
又いうをうをうをんふをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを
をハをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを

まのうちひしゝとしてぐもとおもうぎまふつゝそしていとくうまどろえぞ。
夏ふゝてのひつゝいとうゝとしてうるまであげ四又云ふゝふいとおもくねど
はあらぬとうきさらちふいとかゝるを見ひるまきわぬべるとでなどめよわ
繁つと結ひしゝさるもさとぞふかはるかいとあるゝ人ゝどもえでこれ
ぞゝと言申沈ちりかしゝそなたもがみやかゝるうたるまた公て。
見ひうゝと結ひる中云ふゝふでうかるむいかゝゝまどふあやゝも。
おもそびふんづきかしゝそはもそもでうと色かくゝろうゝもえ
めふんゝとうどかるれ本上ゝのゝ笑ゝうばらゝ紙んふもきどるゝて。
かの人ゝうゝうゝれなゝむゝかかいみゝかるべゝとゝひみる又云ゝて
有侍どきゝるゝて。おゝゝゝゝむゝ。いま一ゝびゝ和ゝとえきゝゝゝど。

おかつかゝゝてかゝゝなゝむゝとよ又時のまゝてゝいとでゝもゝふゝゝよせ
なゝむゝとゝるかひゝるゝゝゝみゝゝゝ行ゝゝゝ海ゝゝゝ和ゝゝ見ひゝゝかゝゝ。
侍のおもかゝゝゝゝかゝゝゝゝ

ひいでゝ世あるも、さべきいとゝびゆゝしく人あがるとなどいふんの
ゐぐ、まことふうゝあわゝしぐふも、なきぬべきわざもさし、
○此物語乃本意は、勧善懲悪といひ、はかなき色のいゝ〳〵さえ
ゝいふさいみしきもひごとにはたらわぬ、はたさゝふたるもふあ
らぢ、又よむ人もさゝふさるいゝ〳〵めふもかりぐゝ、そのゆゑハ、
まづ源氏君をば、よ給づふもぐとて、よた人の本に倣とゝ撰だ、
えむ人も、此君はたゝるぐんを、行るもとゝんはつべし、給るふ
此人はふ意のみぐもおかゝ、中ふハゝめぐひなき不義もたる
をえむ人ゝかゝ、給よき人ゝうしぐふさるゆゝひ乃ふるとバ、なふ
うふゝうゝかゝゝもとやうふ思ふんゝそたきもゝべきを、又女ゝてハ、

藤壺、中宮ハ、はかふよき人ゝよゝて、ほえゝうをバ、ゝとゝ沖よゝむ女ゝそ
のんゝぐへを、ゝゝひゝゝふべきゝぐ、ゝゝふ源氏君ゝるぐ沖ゝ、ほをバ、
いふゝうゝいゝむ、ゝとゝゝわをもて、いゝぐ、中ゝふぬ色沖、いぐゝふゝる
てゝゝゝもゝゝめ、いでゝゝそのいゝ〳〵えゝハるべき、又よきゝるゝを
しゝる人ゝぐんゝひあゝ、ゝきゝる沖せ〳〵人ゝゝぐひふあふ
ゝゝふ書ゝゝ受ふてゝ、新名徴悪ふゝあゝ、えかの柏木君浮舟、
君ゝぐの、君にゝゝて、男沖ゝゝ、はひゝるぐともて、ゝとゝゝめ
もぐ、ゝてハ源氏君をば、行ゝゝいゝむ、ゝるゝぐゝ、君のゝぐふゝ、
みぐゝとおゝくゝて、はふいゝもかゝゝきゝ、みゝぐしの行〳〵ふをゝさ
へ、みぐゝゝなゝとゝる人ゝなれぐ、よのつねの縁をもていゝぐ、新も

保〳〵ふくとがえ給ひて。いとゝ福ふもひとしきふべきふようだ
と。をでゝ〳〵。帝と后と大だいこの御もち給ひそ乃
身右上天皇ゆ給ふ号をさへ給ひ。たゞ世ふ行ぬるかく。未
まだ。さうえんゆふをえて。ハゝもとうハぬ色をつくしむんをばかさき
む。中でゝ。ちとづゝ。ちづゝ給ふてゝ。まこ。ハ弘徽殿大后ゆ。よろさ
まふうまえ。ゆつる。ちとざゝて。えのゝ下ゆ人。ゝるかゝ。神仏もか
ぐえ給ふ。ちるふ也。ゝもバ。いよ〳〵ぬ色のいきゝ。えまハ。ゆわ。ぐゝ。懲
恥のことさゝ。ふゝ。なふ。ちゝ。ゝ。ちゝわをもていひそぎさゝぐ。此
えつゝ。ぬ色ふよりて。右上天をゆ。ちり給ふ。ふわゝ。ばや。かゝてもゆ
ふ懲恥。ゝいとむとゝる。ぬ色ゆ。いまゝ。ゆふゆわ。がゝきゝ。ふゝを。な

ふいとゝ。ゆも。ゆ。夕色。ゆ。ゝ。云。やゝ。ゆ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ハ。ゆ。ゆ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

そ[illegible]て[illegible]ても、[illegible]べし。[illegible]むつ[illegible]の人の苦[illegible]を
[illegible]ん[illegible]かくてそは[illegible]を[illegible]しむんをおろ[illegible]
[illegible]ん[illegible]。今[illegible]む人のん[illegible]べきと[illegible]
[illegible]巻云、[illegible]のおまへて、[illegible]
[illegible]ひそみそ[illegible]つき[illegible]
[illegible]ふそ[illegible]ん[illegible]ゆ[illegible]れやとの[illegible]

今は源氏物語をよむ人も、[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]物語、[illegible]ねぐ[illegible]
[illegible]や、[illegible]中[illegible]

[illegible]ハ[illegible]べ[illegible]わ[illegible]
[illegible]ものづ[illegible]
[illegible]まが[illegible]べ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]て、[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]

のやうにおもひあつる。保元元年のこと。
りゝきべゝ。義誠とせざこゝろはきゝゝゝ。みの中やうにをしへゝゝゝゝ
ざ。為とさゝゝゝゝるかゝゝそぞれりなべきゝゝとゝゝよゝのはちゝ人いづれも乃
書にはるゝ。その世ゝの弦をばゝゝゝとゝゝみどゝて。えゝこぶふ儒佛の
ゝゝふのゝゝ屋つゝひて。ゝひて。かの書どものおもむきふかゝへむゝとのゝゝ
説まげらゝゝは苦ゝゝゝ。宣旨の和ゝゝゝ人の癖ふゝて。儒仏ふゝゝゝゝは
人ゝ一人もなきぞゝゝ。ゝゝゝゝとば此和佛をも。仏のゝゝゝゝふゝ儒佛
のゝのゝゝへ。えきつゝまむゝせゝゝ。仏のゝゝゝゝ。和のゝゝゝゝにゝゝて。ゝにゝ
ゝふいゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ義のゝゝふゝゝゝゝをば。ゝひて。ゝゝゝゝゝゝて。あ
ゝゝゝゝゝゝ

所むき中〳〵ふんちきなるぞとそいつべき。儒仏の教とハおも
むきうかわてこそなれ。他のなすれをまるといまこそ。おゝ〳〵えうえきな
分をゝさめ。孔をもおきも法むべきなり。道ゆゑ。こゝろぬべきも。人のおやの
ゑをゆふんちるぞを。なれと思ひちゝバ。不孝ケウ者ハふるまゝ〳〵民
のいつつき。奴のたとえとおつまゝおもひちゝむゝハふ不仁の悪をあ
ゆすぐきれ。不仁なる悪不孝なるゆゑ。よふあるハ。いひのてゆゆゞ。ものゝ
ちまをちゝ孫をぞかゝ。まゝバ他人をきるゆゑぞと
いまゝ〳〵さゝわて。そまをむゝて。ちる時をおのづゝ教誡なるな
べきるハ。ふるゞふるておかるべきを。そゞえちり教誡のあぞゝん
ゆてえゝむゝハ中〳〵ものぞゝ。ひぞありぬべき。位名他人のをハ

ゆゝ〳〵むゝ今を人ふゝゞ。ろ。ゆるゝ人をかゆゝこゝを
ゆゝむ人〳〵ハ。ゆゝひて人よかるべきちわゝぞ。といへをゆゝべ〳〵。ゆゝハ位
名。他悪ゆゝ。他のわゝをゆゝぞわ〳〵ゆゝまひをいま〳〵ゆ
ゝる祖ゝて。そのゆゝ〳〵毋ゝ。ゆゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゆゝ悪ゝゝ
お将ゝ〳〵。ゆゝ乃。ゆゝあゝぞゝ。ゆゝさゝえて。ゆゝぞゝゝわ〳〵ゆゝふゆ
ゝゝゝゝバゝゝゝゝゝゝゝ。如若懲ゆのいま〳〵ゆのんぞへゝふゞ
ものゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゆゝ〳〵めゝゝバよのゝゝ乃儒仏のゝ乃
〳〵ゆゝハゆゝぞゝゝ。ゆゝ氏の他ぞゝわゝゆゝゝゝゝゝ知べ〳〵ゝぞめ
ふゝいゝゝぞ〳〵。物他ゝゝべゝゝふ他乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ
ゝゝゝ他をゞゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

もていふべきかわるべし。その中に盛者必衰。會者定理にしてうをう
ちうしむといつる流れ。ぎをかさしてはつるべきうあかうるをそもそも、
んぢのみるもまぐ佛ぢそといつかねをぢはかもあくつうそれをだも
つるそかしてし傷のそかどよりもをしへのきびしきうをしてうをぞ
て人乃情あはきうべきさをかどもかてて人のうそかのおもむき
やうそちうむぎかねのうそかうをうがきこがり。女をべまでもわ
やうそ感ぜるうそ物うそ行ふつをてもまづ学そ学かうへ
ぬうと。うるハ学ぢ中のうもも人の身ぢうへも。はとかを。家ぢかりるみ
をぢあづうるうかをうそうざどどうわうるうのかとうをを。む
ろうそ身をうへうる後の学うをして人のおもむきぬべううどかうきも

らせうるみちかをして。そそ学ぢをうる。学の中ぢ人乃んをそるうそも
みどうきも。さうきもかうちかるも。おうをべうみる。学をうへかを
をゆるがゆるうう。うるハ学ぢをうをかきをうをかうつを。かるハ身ぢうきな
ぎ記ううもへぬをうかど。さうかぢううちそ。書像の表りやつう
ようぢかをうる。心乃あうかうもんうかてかをかかをどど文をるかう
かつきて。物の行うを乃。海きかうかをかかうかうも。深
氏。表をうどを。て人物うきを人をみる。うもをれぢけ佛のをを忘
をかかをそそをうる。うを学の中ぢかりうを物をて。ちるうをひかうり
ぬるよか。人の情乃。かうかうを乃をうどを者をる。ををバをもうかを佛のを
のうそそを多ううをるも。をのををうををううしをむうかをわう

ぞ。しもぞそのもとづかはきてのあとを見をるもいしもしの
きは道理をたゞさむとめ形ばかりぞ保氏、見は老の学ちな
らはへりとあるかき。筆をとりかくべきうるおるふ。些見のるハ衰へ
りとをもとも。筆をとりかくぞしもぞよれるすけうばあるやこと
をもて。盛者必衰ぞいふたとりはたとをるふたつること
たるべし。又注釈ぞとふてそ。然いへも。しもうハ些和ぞりはしみ。さる
たくありをもひたるものかりを学とそもそ。此物語ふ。仏のそふ入るとぞ
のるをそうなぐふいつるをえて。業式紙を。傍老ぐろある者ハ。仏老の
見識とそもひ。ちうしはちもがハ。人を些とふおもむをむとふ書
ぞ。ぞいふとぐひいづもあのがるれとふとるものしは和語を。

たるとうるものふをかるび。よの人のかをみるれのをとふ和ものれば。その
をぐはをきも。しもぞ学の中はるをるはは。世書ふるをハわも。いとぐう
をはたりはしはるをふいふべき。又をふるる。態澤氏が些和語乃
外傳といふもの。そぞ名ふいるを。保氏和語をおもてみをはを色はて
をとかをぐも。実ハはを色はるはふるび些るを。些和語をはをるる人ふも。
西しきふるるる人あり。比和ぐるわをとるをを筆をを。学はる未
ふちりゆきハ。上代乃美風おるをへる。俗り流をんるを。筆をふる
をいへぐも。りるふ西しき書ハ。人いるて近づきびるる人をを
きハ学ふはを称るをび。表をるもて出るるをハ多乃をも。和をるこ
て。人いるふはもハをを書久しはるぞ。又をてるるへるれぞ。学き

ふるゝをきゝバ、出おきてゝ、手淫をなさしめ、こゝろ、こゝ、ゝ、ゝ、

他思ひなくにてそなりぬ。他思ひなくしてはそハまたくふるもくふるなりぬ。その云ふして。
まるこゝろと思ひもそ。儒者ごゝろ。たのみやびるをもあるべき物。
まことふ世間あるとゝ。そハ後の学ふもしん人のうへふそわとゝ。ごゝ。えよ
ゝ。まるゝ成ふんをしゝて。まるふそわゝび。法ふわゝふ正しき書を。人
いゝてゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ

ゆひて別(ベチ)うまはらぶとしいふまはのおもむきはわるふることもてぐるあ
ぞう此外はいまはのやう和尚の書くはは中の泪をつぎ〳〵ふちて
しづ〳〵はく出る文のまふりかはりぞ〳〵おのがいとまうき儒者お
ほしふまうせていつるまはりて中ふかうきるゆれはまづつる
とぐるまべ〳〵いくみづわるこゝろ七篇ういく此はなハむろ
こゝ司馬遷をぐ窮愁よわりして憤(イキドホリ)を書ふ發(ハツ)して一家はは言はは
なせるぐぞ〳〵或はは父為はふはは史宦巻ふあくまて二女子を
養育はうて分はもづきはく云はは辛苦はるはうはうはうはは
を他是云ふまうはうはは出して風刺教誡をまう〳〵いきどうわ
をやをんはまといふこと又ぐ〳〵やんのおしまうふこそはうまはは

ちはうまおがぐぞ又はは京はのはのまぐまはは風倫ふうはて一家八
太事こゝてあうはは篇じうまはは儒者ぞはふしてゑ
こゝまはうこゝはふぞまのはうはのこゝはづてはは篇のこゝろをま
らぐるものゑ其篇の中ふ原氏若く藻壺中文の巻事はぞぐはふハ
いまやこゝきはるふうきなゝ孤臣はいまおこゝろしくまぐき
あやまちはのうまとはまうまこゝる気象を見よくいひて志ひて風
倫ふをむとまうまぐまはは巻を引ていふるはく原
氏若此はは後はうハいまあこゝろしくはるまぐかはるまはくおりひ
まはの結ひあぐ〳〵まは後はは不獄月愛見ふ志びく〳〵愛はひふ
行とはいまむはは蚤虫中巻はは風はは後いまおこゝろしはあやまち

なりくさくさるんすべば、まさふ書べしやとし
そそして俗倫をもむりハ一ゑびさいまゝ先ばぐ又さうてそもむ
ゑふぞ物りぬべき。又みをつらゝ物をふゝ。當代のがく位りか
ゑひゑひやるゑ俗。ゑひのごくうれゝとおびを。
ゑとハ源氏ゑ物おびをゑて。當代とハ次系院のゆゑし。
もゝかの俗のぢくゝなゝんゑハ源氏ゑ次系院の位ふつき物るふ
つまてハゝゝゝおゑゝゝゝゝゝゑひて。皇乱のまびもゆるゑ俗物きゑへ
ゑさるふゝてゑ出べゝ。やうふゑひのごくうれゝとおびをれどハ書べ
きものゝは。ゑれけ和のまびもゆ物ゝゝゝゝゝ

かぐやひめのうまれたる所なるべきかぐわしく
さて此院のものまねをハ源氏君の第えをきこえむとあふさる
そハまぐいづくの物語りもむかしよりきゝあつかいふ人きて
人のうへをいふにそハよふわるくゆるされるなどをつくていふ中ふ
身はさえもの人のようなるすがたにハ人の第ふさんもし
きてつひふうへなきみさをなるすがたをつゝそ和歌の多くの仮
ものし此あるうもし源氏君はは第えをきこえてかむとをるふ人のさう
えはきハまわハ帝はは位うて執政大臣といへども人をうか
わるねうなるふふ上皇はは号をかゝゆゝ志めむとをるふ
をるべきよりおくてハゆるりなくて俗なふ俗をうる先

くゆるうし帝はは父くせし料ふけあのようぎをハ源ものし
此こそ帝はは父ふて后と大臣をはふふもち給うえふ帝はは父
ふてさへおそゝゆをようとをもて后上皇にをりなるかそそしをと
くそでゝきは第はは第えハきハまわきるなわけそ号かゝふしを
なん料しといふわゝハ藤壺光ふ東宮の俗のけあのようぎを
やくよりもわをるがみふゝ作東へをそうふ妻をむとをる時の河ふ
いそゝこをハきかゝゆくをはの大すゝ作るこをはをおそゝ俗
ふ院きさいの宮ようぎ今よをまつりごち給ふおりぎはは先をを
てかつてよかなるすふやあるを出作ゝ是かふおいるゝしの第ハ
ゆるひうをへ作りをもふ作りくいう作むふ作天乃つぎなるふよりて

奏し給ふ事ども。

きさいの宮の大夫とは、今次条院の、実母方の父を申し給ふ。

孔子といふ人、さて世に奏して、実母方の父を申して、孝じ給ふ。

さいさいの宮よりたまはる物、相童、帝、藤童、中務、源氏、名ばかりの侍

ども、ふかうつかうまつりぬるかはりとて、やせむとし給ふ。

さて、物のまぎれもなく、いつくしうえて、かつがつぬる。

いつくしうふるまひて、物のまぎれもなくば、世の方々、めでたかるべ

ぬ。さよりは、物なかりてといふべきけうとうてしいつる言ふ。

人とつきて、文のを申さるべし。さて、給ることをいつる。

りぢは給へ。さいさいの宮の、給ふまゝにて

奏し給ふ。

かゝて奏し給ふ。きさいの宮、みかどの、侍ふのゝ、へる日、

いさゝか、人のもとにでもぞ、おまし給ふ。後の世までのとがめ、べりなるべし。

源氏君は、実の父なるものと、思ひ給へて、上の

文のを、いよ〳〵、申し給ふ。物のまぎれもなくば、次第に、

ろ〳〵、思ひて、物なれ給ふ。

又、侍の中せる間ふ、天変、きりふさゝ、学問中、づかうまつりぬ。

いさゝか、物のこゝろ、思ひ給へ、かりつるわざとて、給りつる。やう

やうは、ひゝめかし、物なして、行くもの、させ給ふべき日ふ、

つゝしみ、とがをも、思ひて、よほづのゝ、おやの位、学よりぞ、まるふ。

ゆる形をうゝ。

佛天の告くゝしひ。後の母までのとがめをべゝくいひ。天ぢんのさゝゝハ
ひ。まゝくいひとがゝとゝえをくいつる。みる実の法父をゝろゝ〳〵えをで
あるゝ。ゝ〳〵ゝ〳〵。他のゝぎゝ。他方のゝゝゝゝむハ。そのとがえを。
おゝ〳〵原氏。ゝふゝゝゝか〳〵。ゝべきふ。ゝゝ。法ゝ。ふのゝかきてゝせる
をゝふべ〳〵。楊貴妃。ゝふ。蓮ゝ。ゝの。字法ゝて。舟。尼ふ。実の父ゝ。柏ゝ
ゝ形ゝゝゝと。ゝをゝて。ゝ。ひ〳〵ゝゝの。他ふ。ゝ。ふ〳〵ぬいゝんなゝハ。
罪ゝ法ゝ。ゝて。ゝぬべゝりきるゝゝ。ゝぢゝの。ゝゝふゝゝゝるゝゝと。ゝ。合せ
てゝゝるべ〳〵。ゝゝゝる。親のゝ。法ゝよりゝゝ。ゝるゝハ。人の子ゝ。ゝ。あ
ゝも。ゝ〳〵ぬゝ。親のゝ〳〵。ゝきゝゝゝゝ。ゝ。ゝ乃。むゝいゝ。ゝゝふゝり。

かゝゝふゝ。法。院の。ゝ。かゝ〳〵。帝位ゝのゝ〳〵せゝて。天の下をゝ
ろ〳〵ゝゝゝゝゝ。父原氏。ゝ。ゝ。原氏。ゝ。ゝ。法ゝ。ゝ。ゝ。法
德ゝゝゝゝゝ

とゝ、ひきて例をきわ、人〳〵おかゝしたゝよせて、さもやゆ
ばりはまゝ〳〵ばよろづまぞあづ〳〵きる、秋のつゝとえん〳〵ゆ
を改たゆ物をとゝのふべきもの〳〵。
いつゝ〳〵はなをせををゆ、源氏、考ゆは位ゆはたまなる海
ゆ〳〵おづ〳〵えて、そ例を考へさせるし、ひきゝ例をき
ゝ〳〵いつゝゆて初べ〳〵、さてつひゆは位をゆづ〳〵むゝおづし
えゝてまづを改たゆ物をゝ〳〵なり給るし。
そゝ〳〵此物のまゝびきゆるゆ、さきゞゆはをゝりつぎ〳〵ゆいひ
まてゆ、ゆ〳〵ゆて、源氏、考をは位ゝ〳〵はたまなる〳〵むゝおづゆ
ゝりるゝ〳〵ゆへおゝ〳〵る、海月のおもむきゆよゝ考ゆ申〳〵。

さて此考ゆ第えゆきゆゝ書むゝなゝゝば、今一きゞゝをゝめて、
帝のは位ゝはたまなるべきゆを上天皇ゆやゝゆるゝ、位ゆ〳〵
の源〳〵ゝをつゝまるものゝ、そは狩衣ゆ、ゆ大將をはたひゝ
帝に〳〵るは此物語乃源氏考ゆまゆびて、今一きえをゝ考て出
ゆゝるゆ、ゆ大物を帝ゆは位ゆつゝまるゆよりて、位ゝゝやまこゝ
ゆはゝりゆゝ考きて、そのゝ〳〵ゆ〳〵ゆ、ゆ〳〵ゆ源氏ゆゆを紫式
部をそをゝ〳〵ひゝる物まて、帝ゆは位をゝのゝ〳〵て、今上天皇
も、そのゝ〳〵ゆて、ゆゝりゆきゆゆ、桐壺ゆ、ゆ女人の桐（ナウ）〳〵ゝ桐
ゆ、ゆのおやゝ〳〵ゆりゝ、帝ゆは、うみゆきゝゝゆゆのゝるべき相おゝ〳〵
まゝ人乃、そゝゝゝゆて、ひゝみゝゝゆゝゝゝ

えとりやげ下がまへをおきて、けものまぎれをかきてかゝる
ぞ芳野の御殿を拾ひぬ。ハうかえぬさるゆふ、うたもてゆきて、蔵もちまゐ
ゐつて、は住うつけをゝむとつる。形ゝ、此者の御ふ、女院のはんば、
ひるとの御ふみゝちけ市に、ゝと和きておぐ〜見しなぐ〜、住を
ゆぐゝを拾ひをゝ御ぐ、おぐし〜見ゝ〜ゝびるふゝと行ゝるのはむ
あゝゝを見て、及ぐぬまはゆゝ、のぐり待ゝんゝ行ゝるゝを市のは住う
のぐを拾ふべき物を、ぐも、その一きをぐ、ゝをゝ、ゝふのとせゝるゝいふは
ゝうぬゝけ下んを、ゝつせゝる御ゆて、ふゝもゝ〜んふうき他をぐゆし、大
ゝゝけものゝ御ぎを御ゝきゝゝるゝゝは此御氏、ゝ妹巻え御きはゝんむ
ゝゝゆ見ゝゝ〜ゝふて、上伴乃あゝもゝきぐゝをかゝむゝへてゝるべゝ物か

いそぐ、かの狭ぎゝもハおゝゝゝと行ゝゝも此和歌をまゝ拾びゝ〜、ゝゝし
ぐゝゝゝけゝゝゝをかへてゝゝる中ふ、大将の、女二、ゝゝり、ゝ見びてゝを、なりて、
ゝみ拾ゝるはゝるを、ゝぐ拾ゝけんの乃ゝをふ、ふゝゝて、まぎゝゝゝて、後ゝ
その拾ゝる御、ゝ宮にゝゝて、ゝゝむといふゝゝぐめゝゝる時、天照大御神乃
は岩ふゝりて、ゝゝひふけ大将を住ゝ拾ゝまゝゝゝる、ハ、ゝゝゝけ泉
院乃和のゝ、ゝ、ゝ、

畑ゐして、たうとちきふも、ねうもの、まげこまよわさき
ある、ぬる畑後ども、ハ行すもちゝを、ゆく、んをいまて書足ゝ、も
ゐ、ぞ、ゝぐ一ゐゝわ、て、うるハ、ゑづゝふ、奥わるゝ、ぶ、むよう、おど
ろおぐろゝしに、ゑ、ゝ、ぶ、ぐて、いづも、ゝく、畑のあ、ゑなゑ
ちぐ、ぶどハ、ゝ、ゝも、こゝゆゑふぬゝ、ハ行ゝ、ぶ、又こゑ、より後の畑ども
ゑ、さぐろも、ぶどハ、行すも、ゆゝ、ゝけ畑ぐゝわ、ゝ、ゑを、ぶゝひて、ん
をいまてゝわゝハゐゑゆるものゝ、こよ、ぶく、あゝ、ゆわ、ゆゑ、ゑこ
ゝ、ぶるゝ、ぶゝ、ぐ、ぶ、畑後ぐ、ちよ、ぶく、ゝ、ぶふ、ゆく、ゝ、ぶづふんをい
ゆゝ、ちる畑ゆて、ゆゝ、ゝ、ぶ、文、畑の、ゑで、ゝ、ゝハ、ゝ、ゝふ、ゆいゝぐ、
ふ、ぬゝ、人、乃、ゝ、ゆ、ぐ、ゆひ、ゆ、ゑ、秋、ゑ、ゆ、ゝ、ぶ、ゝ、ぶ、ゝ、ゑの、ゝ、ゝ、き、

本、ゑ、ぶ、ゝ、ちる、ぶ、ぐ、ゆ、で、ゆ、ゝ、ゝ、ゝ、ぶ、ゑ、ゑ、で、ゝ、ゝ、中、ふ、ゆ、男女、その
人、ゝ、ぶ、ゆ、ゆ、ひ、ん、ぐ、せ、を、おの、ゝ、ち、ゝ、ゝ、ふ、ゆ、ぶ、ゆ、ゝ、ゝ、ゑ、ゑ、ゝ、ゑ、ゑ
ぐ、ゝ、ゝ、ゝ

ざるはちゐあるはなほ酒些和俗りハさるゑくゞ〳〵にくまぐま
でのるかと好くいゝとゝちそ〳〵ものよふゑかつ〳〵るもとゝちゆり
好き続ゝうゝうしてむひひ〳〵むゞゞ〳〵にて大なる人の情(コヽロ)の行ゑ
や〳〵世ほまるハやまゆとゝもろゝいゝ人へ今ゆくさにあゝとゞゆ
ゞきゆゝハゝ〳〵ゞゝるゞあゞゆる文をべゝ老〳〵ゝゝ中ゆゑゞゝ〳〵
あゞろく〳〵〳〵めさむるやゝゝゝるすハをゝ〳〵好てゝちゞめよりをえ
ゝもまゞ〳〵めゞよのつゆゝなゞゝゝゝるゝゆゝゆゞやゝ好るをゞゞをの
ゝいひてゝ〳〵ゝき書好ゝゞゝゝよむゝゝゝゝあゞゆるゝゝゝ〳〵
ゝむゝゝハなゝゝてゝゝめゞゝゝゞきゆゝ〳〵のゝゝゞあゞゆるゝ〳〵おのゝゝを
ゝ〳〵るゞゞゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ〳〵ゝゝゝ世ゆゞゝゝ世よみゝゝてき

かるゝゝゝゝかつゝゝゝゝ好ゝゆるをゝゞ〳〵書ゞゝゝハゞゞゝゝゝゝゝぬ
ゞふ説ゝゝゝむゝゝゝゝゝゝゞ体をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ書ゝゝゝ年月を
ゝゝ挑ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝをゞゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○ゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かく書うるを、うゐ文字ハ、まことふるまて、うゐ文字同じ
ことなれ、いせ物語、後ろふるまでとなく、おとこ物語
ふまなる、物語ふ此物語の、何長くなりにいせ物語ふ
なおなるふてそ、ゐ文のやうにかきなびるまでなど
て、ゐ文ゐ物語みどりきことなて、おとりまさる物語ゐ
むしまるハうれり後こなびゐ物語ゐ
うて、ゐ文きがうしきこハ、ゐ物語より後ゐ物語ゐ、物語ゐ又
むしむきふ、ゐ物語ゐ、ゐ文しなべきゐ物語ゐ、みどりかて、ゐ
ろきハ、ゐ物語、長くて、ゐ物語の文ゐ、ゐ物語ゐ
ゐ、ゐふいうづ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ

も、ゐ物語ふいよ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ
ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ
しかく書むしつゐんゐ物語ハあるびゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ
ゐ文ゐれ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ
きゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ
○ゐ物語ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ
ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ
ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ
大ゐ文ハ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ
ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ、ゐ物語ゐ

ふとしまづ徒然草・源氏ハ狭衣ぞよろづしきしいふ人も
ありなんと・物語・さざれものもし・ほらめき古物語ぞものふらうぶとバ・
ぶらうよりはるかに・よはしぐらぬ・源氏のうりまさりてハ・
○此物語・源氏・宇津保・うづ・さそ・よろ人・うる人のうへハ・行す
も・そぞろきさまふほえんうるふ・そのよみのつる・あのそハ・おそる事
一つもなくしてまさる人の他・ほうけよきふりてハ・あハれきやう
ふいてうこのみ・さうぶ・ぶんうる・そハ・此物語の中・人々・ものあそ
みる紫式部・うづ・うるはとバ・ほむとバ・うれが・ふるはるゆゑ・
相撲・ふ・ふりき・ふ・はぐ・やうふ・みぐりがうきぬ・ふきめぐ
ふきるほぐ・ばらんぐ・ゆるとべ・夕顔・ふ・ちきめよのうぐや

うはちぢはぐも・さるハうぶ・ものはるめと・ふもはるとハ・うもむす
るぐも・そうぐ・かぬよう・ふ・掃・きふ・うはきばんまぐひぐとふ・ぶ
ふうとゆうぬあや・ふ・うふ・ぶ・又・うぐ・ふうぐ・はふぐりはてふも
ふうぬを・をとかうあわをそ・ふはの伝・ぶうぬとふ・ぶえ・ふるうぐ
ふあぐをふうふ・ふりり・ふうぐ・ふぐるや・ふ・ふ・ふ・伝の
のあうきゆもはきと・ふ・ふ・ふ・ふかとうぐ・ふ・ふはきばんうまう
きふ・ぐぐ・ふぐる・ぐふの・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ
きふ・ぐぐふるはふうぐふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ
やうふうぐぬはにつきぐふ・ふはふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ
ぐまりて・ふうきはにぐ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ

めでふうに、ちとおもしろくおもしろくことおもしろくどハおもしろくもやさきもゆふ雨もゆふ夜ふ、よかゝ孫どをとかゝふ、ゆびやうおもしろくことづくしひるどゝ成よろゝうゆ成ゝ紙の帳きをふいくでかゝふ、よかゝ孫どゝそのもるとハおもしろおもしろ絵角もふ、ゆびでてなきふ、いとぐおもしろゝ、きゝ成おぶゝくるまく空、海ち足紙ふゝさ、ふどちもおぞ、ゆびちゝれかふ宮本もふもとべきのふ、美ゆびふ、ゆびゝ、ゆびゝ、ゆびゝ

たゝ、ぎのもれふをうるべしといふるハ女そもゝ、ちぎりをもけるすハ、ものよ
りとしもとゝもるべきことわりとバそもゝふほうるべきそぎふ行ゝびゝいひて、
こゝろゝほこうるんうきことをもつゝせもうるし、又日をふをうせめむをめけ
るゆゑ武士ハ、ものゝ法をしうるを、ゝ、ゝ、むりのきゝ、ほうるをゝぎき
をもてわそ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝかきゝ、ゝ、ゝ、此女けやうゆゑうもうふるふさバの
ものゝしくいふ、ゝきゝるすハんしざるを、業武士みゝ、ゝ、ゝ、学問ゝをふく
むんをんをむゝ、ゝ、ゝふゝ、ゝ、ゝ、ゝふいゝ、ゝ行きるけやうふいひな
しるものゝ、ゝ、ゝをあけをふ、大学寮けゝ、ゝ、ゝ、

もゝさうゝぎなるハ。みづゝかゝりて。ゆてつをちりゝるものふゝ。
人よかゝるはなどハいとゝゝえゝひゝゝようふうハべをうぐりてゝそ
ゆをゆゝ。きめきゝふそうちいでゝ。ゐゝえゝをいみゝしたゝものゝ。ゑの
ゝゐゝゑゆめゝゝゆふゝゐゝゝひのゝそゝふゆきて。いゝゝびよゝゝ。はゝをといふす
ゝゝゝゝゑをゆふゝゐゝゝゝ。その。ゝゝゝざゝゝゝ。ゝゝゝふゝゝよゝまゝゝう
いふものふゝて。んのゝちゝゝゝゝ

き人さ・あの方それをきるうさ・ゆ・ゆ・ゆ

ふ〜〜〜

で、こゝに湯くいつり病ザ病をもちて沈うをる和ふ俳諧くいつるハ多く
業のこゝ所しるの同じ云形ゞ〻病を、こゝろわれる形どやうふいつふ
ハさしとまもなを、こゝろ俳のむるどいつふてハわやしぎふ物のゆるこゝる
べ〻こゝべ〻けれ俳諧の中ふそいつこゝろわれるふふ人をつまこゝろやう
のゝゆゞひ多〻今ゆ言乃んこゝてハ業俳のむるどいこゝもそ形ふの
繪きもこゝろつゝ言〻おゞ西べゝ先もどかゝやこゝれてハ時言ふこゝろ
てゝいるこゝどゝ〻ゆこゝへどかゝらつきけこゝつきゆどいふこゝハ今
の言ふてハいこゝ繪き俗ふもどゝむこゝハさハわゝざゝ〻ふや
俳諧ふそこゝるき人の形をほそる俗こゝもおゝくいつゝこゝるふ
てもゆ代〻ゆこゝひあるこゝ俳こゝるだ〻こゝべ〻こゝゆのこゝ

ひをこゝ〻こゝるべきこゝる。ものゞこゝるふ俳こゝる一つのんゆゝ。
○俗のこゝふ此俳諧こゝの中ひゆゝるこゝ俳こゝるわゝこゝこゝバ下ざ
まゆものこゝうへをもゝこゝ〻かゝべきこゝるざゆこゝふこゝで上ざ西のこ
こゝのこゝふていやゝき者ゆこゝうへこゝそハこゝこゝかゝざるハいこゝゆるんふゝ
ちこゝふこゝべ〻言中ハこゝきよゝ〻人のゝどゝ〻ふこゝもゝ〻ふ
おの〻こゝの言ゆ中のこゝる俳こゝそいふ〻こゝいこゝ〻人のよの中今こゝ
いまゆこゝの中ゝこゝるき人こゝふゝるき人ゞちの言中こゝゝいやゝ俳を
のこゝ繪きものゝよのこゝこゝもゝこゝもの西のよの中こゝる程ハ
る程乃言ゆ中こゝゝきゞゝハあき人の言中こゝて俳ふんこゝこゝふ
こゝゝおゝくハこゝのおこゝゝ〻言ゆ中のこゝる俳おこゝふこゝゞこゝ。

かくて物語書ハ今はた[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
しきものなどの、えるゝ和ゝハわゝで、ゝるべきほどゝゝ上ざゝの人
のゝてゝゝぶものゝわゝしゝバゝの上ざゝゝ人ゝゝ乃ゝ中にゝゝ
ゝゝゝ

くちよりむべきこゝろをもへし。ほいつゝかまび人の
情を。たゞ今。ゐるときみじかきうたゝねあとハいへども。その中ゝ時
代のあゝひ。分けわかぬ。おのもくが云中ゝつきて。いとゝいと
ゐるゝもなきふゝあゝびかゝてゐも。情の和ふ感ぜるよりゝ。よみ出
ほるものをバいふ。しへ今ときみじかるとハいるまじかるべきて
和りわかぬゝも。上つ代てそ。中むゝよりとこゝろ。ゝハしと。
ゝあゝびゝ今ゝふんをのゝ。きりけきゝふゝみいび。ゐあるゝびいふ
へのゝ代中ゝ和びて。ゝふもむきふゝむるものゝ形をバいふゝへ乃云乃
きゝゐ人のんぞへゝるものを。よゝゝゝとゝハゝゐんぬるものし又いゝゝへ
をまものぶといふ中ゝ。ゝ紫系ゝりゝるゝのゝ云あゝ。ゝすと

ゐゝゝして。その云ゐいゝゝ。ゆゝりふゝれば。さゝゝおきて。ゐゝりゝたゝゝ系
ゝりゝゝゐるを。中ゝ和ぶゝゐるゝ。そのゝゝけゝゝものゝ。むゝぎふいや
しゝゐゝ。山ゝゝけゝゝゝ。そゝバ。たゝの云代ゝのぶゝ
けきゝて。中けゐゝゝ。上ゝ云けゝ人のんゝゝゝ。その和の云けゝ中をも。
ゝゝでハゐゐゝゐるゝゝを。今の云ふゝて。そもゝゝふゝゝんしゝゐゝ。
ゝの和けをゝゝふまゝるゝゝ和しゝふゝへのゝ。ゝゝをゝゝのゝ
ゐてゝゝ。その云けゝぞきつる。ゐけんゝゝゝゝやゝけゝゝゝるゐゝ。
ゝ和ぶふけゝゝきゝゝゝゝけゝ。物語を。ゐ者ふゝみゝゝ。ゐもゝゐ
氏系をゝゝめて。ゝゐるけゝゝゝゝけゝゝゝて。みやびゝゝる人ゝ
ゝ。ゐゝゝゝして。まのゝゝゝゝゝけゝゝ。その和語を

きゝづたへて、その人のうちに、ぞ、ゐるふる
まひも、又、そのうゝ、ゆきの上乃、ゐなをきわく、ゆかあやけるゆや
むこゝろあき、ゆきうちくのすゞもまで、雅（ミヤビ）なる事ゆくぎわ、
今ゆうつ乃、色ゆきへうゝ、ゐるがむくゝ、ゆとバ、ゆうへぞのゐ乃ゐ
まゝる、おゆき、首りまゐん乃、らゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、
いできて、その、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、
くゝゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、
のゝゝぞんぞへゝ、ゝゝぐゝ、ゝゝゝ

花を見でつるゝ乃涙きこえて。又そもふたゝび世にすゝめもぢを感
ぜ〜ずんば。今世人とハこゝ世わすれ。今の人を一日ゝ〜そ。花ハ
あゝもろ〜。月ハあゝ世をうらもろ。ぬる〜人ふをむだりそ
つゝねを。ゝあゝ。ゝぐいふ人人乃ぎて。涼く思ふあふよ多ぎいわる
ぎゝ〜び。今世人乃ゝ乃まふふよみ〜〜ゝを。ゝるもぢるべし。
又旅をぬ人ゝ。旅の心ゝよゝ。恋せぬ人を。恋の心よもむゝるべひを
べてゝ。ゝれ古世をゝ〜ひまゝのぶゝ〜ゝ〜ぢや。そも〜ゝ〜ゝび
のゝ。いゝ人人乃情ゝ〜むゝ〜ふ。まゝ〜心ふよあゝ。ゝあ
ゝぢゝ〜ゝもゝまべゝを。ぢゝふあもふゝゝ。ゝ〜ふいゝむ
ゝゝ。まゝ〜ゝゝるて。みゝ〜ゝゝるハおのづゝ〜世いきゝひぞゝ。

ゝ世ゝきゝるふいふゝゝハゝゝれゝ世ゝぢゝ世ゝゝいるゝく。
心ゝ。世乃ゝゝゝ世ゝ〜いひゝ。ゝる人ゝ人を。ゝく感ぞ〜めむ
ゝゝるゝぞゝゝバ。ゝゝ人人のゝぞゝ。ゝるゝひ実ふゝゝゝるゝ世ゝあ
ゝゝゝゝ。ゝゝゝれゝ〜ゝゝいふゝきふゝ〜ゝぞゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ世ゝゝゝぶべきゝぶゝゝゝむゝゝる。ゝゝ世物ゝゝをゝゝふよ
みゝ〜。ゝゝを世ゝの中世ゝゝゝ世ゝの中ふゝゝて。心ゝゝむゝゝゝゝゝおのづ
ゝゝ世乃ゝゝゝゝゝゝ。情乃ゝゝゝて。ゝの人の情とハゝるふま
ゝゝて。ゝぎ月花をゝゝる弦も。ゝゝゝ〜ゝゝゝ。ゝるべ〜ゝ
を近き世ゝ人ゝ。世ゝ心ゝゝゝゝゝぶゝゝれど。世人乃世中ゝゝゝ
ぞ。その情ふゝゝ〜ゝ。ゝ〜ゝおのゞ今ゝゝふゝゝ世ゝ。ゝむゝゝ。

友ふるまひて、鄙しきなるこのこと、あらはいぞらるるがし。あのこ
ふとりてなどぞ、やまき集どもに何出ぬ形をとるふれ。和語ふうらき
人さ、さ学問者ふるまひ、くさ〳〵ちらぶるあふ、さるな学界のこと
ちぜられて、和どうく〳〵なるやう〳〵きを世和何をよく〳〵みて、そ
のうちに学問中にあるとまるふんのおもなバ、やうきとあバさ〳〵ゆ
いとて、一くらぶり二くらぶりよむ何書も、今は学乃、おのが墨にうを、
足学〳〵むやみふ、ちかく〳〵きて、おのがうちも、べう一
きえまきるあるぞかし。久ちく〳〵も、あよるむ人、又友のみやび
をものぶむ人さ、ふ学問をうんよ〳〵えべきさぶありける。